博士論文審査結果の概要

申 請 者 氏 名	BAO LINGXIAO			
審査委員会主査	職　名	教授	氏　名	ボルジギン　ブレンサイン
論　文　題　目				
内モンゴルにおける家畜品種改良事業と近代日本				
―羊の品種改良を中心に―				

論文の内容の要旨および審査結果の要旨

【博士学位請求論文の要旨】

本論文は、20世紀初頭頃から第二次世界大戦の終戦までの間に、日本が東部内モンゴルで行った家畜品種改良事業の歴史的経緯を考察したものである。

明治維新以降の日本では、アジア周辺地域への対外拡張を目的とした近代的軍隊の編成が進み、毛織物を原料とする軍服の需要が高まった。しかし、畜産資源に乏しい日本は輸入に頼らざるをえず、にわかに国内で牧羊事業を展開することになった。畜産振興政策は国家の緊急課題として浮上し、清朝からモンゴル種羊を調達して国内で飼育を試みたが、成果をあげられずに挫折した。日露戦争以後、日本は東部内モンゴルを含めた「満蒙」地域の権益を獲得し、現地へ進出することになった。そこで、日本国内で挫折したモンゴル種羊の品種改良事業をいよいよ東部内モンゴルの現場で行うことが可能となった。

牧畜民族であるモンゴル人は乾燥で寒冷なモンゴルの自然と遊牧的な生き方に適した種類の家畜を飼育してきた。従って、20世紀初頭に日本からもたらされた家畜品種改良事業はかつてない歴史的できことであり、満鉄の家畜品種改良事業を起点として、戦後の社会主義時代においても推進された家畜品種改良事業はモンゴル人の生業と生活に深い影響を与えた一大事業であった。つまり、モンゴル人にとって家畜品種改良事業は東アジアで一早く近代化に成功した日本によって直接もたらされた「近代化」であったといえる。

日本が家畜品種改良事業を行った東部内モンゴルでは、清朝の半ばごろから、中国本土より大勢の漢人農民が流入し、土地開墾が行われた。漢人農耕民の入植を受けて伝統的な牧畜業が衰退し、20世紀初頭頃になると、定住と半農半牧的なモンゴル人農耕村落社会が広範囲にわたって形成された。日本が「満蒙」へ進出する頃の東部内モンゴルはすでに伝

統的な遊牧社会ではなく、放牧のスタイルは依然放飼いであるものの、放牧地は狭まり、村落を中心とする定住型の牧畜に移行しつつあった。なお、牧畜の衰退と同時に増加した農業の比重がこの地域に半農半牧的な生業を定着させ、農業からもたらされる各種の副産物は定住型牧畜を促進するうえで積極的な役割を果たした。このことは満鉄が行った畜舎式の品種改良事業と整合性が取れ、家畜品種改良事業が短期間で一定の成果をあげた主な要因であった。

「満洲国」建国以前において満鉄は「黒山頭種羊場」(1921)、「沙里種羊場」(1924)、「公主嶺仮種羊場」(1929)など三つの緬羊品種改良施設をつくり、羊毛を目的として育成されたメリノー種羊をもってモンゴル種羊の品種改良を行い、一定の成果をあげた。「満洲国」設立以後、モンゴル種羊の品種改良事業は実践段階に入り、終戦までまさに羊毛をめぐる日本の「生命線」としての使命を背負って展開されたのである。一方、戦後の複雑な日中関係によって満鉄の品種改良事業の遺産は内モンゴルでその姿が隠され、戦後の内モンゴルで行われた家畜品種改良事業との接点も見えなくなったのである。

本論文は六章から構成されているが、その内容はつぎの四段階に分けることができる。第一段階としては、近代日本の対外拡張のなかで求められた羊毛の需要からモンゴルの畜産資源が視野に入った経緯を取り上げた。第二段階としては、日露戦争から「満洲事変」までの間に東部内モンゴルで行ったモンゴル在来種羊とメリノー種羊の品種改良実験について考察した。第三段階としては、「満洲事変」以後から終戦までの間に行われた満鉄の家畜品種改良事業の普及に関して考察した。第四段階としては、満鉄が東部内モンゴルで行っていた家畜品種改良事業の遺産が戦後の内モンゴルでどのように引き継がれたのかについて検討した。

【審査結果の要旨】

本論文は、明治期以降第二次世界大戦終了までの時期に日本人や日本政府系諸機関が実施した東部内モンゴル地域のヒツジの品種改良事業について、ヒツジの調査、日本国内での品種改良事業、現地内モンゴルでの品種改良事業、さらには戦後の内モンゴルに残されたそれら諸事業の影響、等を年代順に明らかにしていった実証研究である。

本研究の優れた点は、日本に残されている多種多様な文献資料類を可能な限り広く収集

し、かつ現地で自ら実施したフィールドワークの成果と照らし合わせることによって、戦前から戦後にかけてそれらの事業が現地に残した強い影響を、独自の視点から解明していったことにある。特に、中華人民共和国成立後の現地内モンゴルでの歴史的文脈の中で意図的に無視、あるいは隠蔽されてきた日本側からの正と負両方の歴史的遺産を、冷静に確定していこうとする著者の研究姿勢は評価できるものである。また、明治期以降第二次世界大戦期に至るまでの長期間にわたる家畜の品種改良事業を、空白期間をおくことなく、年代順に考察して埋めていった点も高く評価すべきであろう。現地におけるフィールドワークと資料調査には多少不足と感じる点もあるが、本論文の学術的価値に影響を与えるものではない。

審査委員会は、令和4年10月2日に本人による学位請求論文の公開発表と論文に対する試問を行った結果、博士(学術)の学位論文として学術的意義のあるものと認め、博士(学術)の学位論文として合格と判断した。